

(右)「瞑想の間」で作品《対話》(2010年、壁にアクリル絵具)を鑑賞するふたり。(下)「出会いの間」にて。作品は展示替えもあり。



“いつか床に
掛けてみたい、憧れ。
作品世界に存分に
ひたりました”



2日目 am10:00
香川県直島

「李禹煥美術館」

いつかお床に 掛けてみたい

賑

やかな高松の街から海を渡って直島に到着し、静かに佇む美術館に至ったとき、美術館全体がお茶室のように感じられました”

高松港からフェリーで50分、ふたりが向かったのは、アートの島として国内外から注目を集める直島。2010年開館の李禹煥美術館は、世界的に著名な現代美術作家・李禹煥氏の初めての個人美術館です。「祖父の代から村瀬家では家族とスタッフで月釜を掛けていますが、現代の作品を使った取り合わせを考えると

き、最も難しいのが掛物です。李禹煥氏の作品は、いつか床に掛けさせていたきたい憧れです。ぜひ美術館に伺い、その世界を鑑賞してみたかった」と村瀬さん。

海と山に囲まれた谷間に建つ美術館は、安藤忠雄氏の設計。コンクリート壁を用いて巧みに周囲の自然を切り取る建築が、作品の一部のような静謐な空間を生み出します。「日常から離れて作品と向かい合うことができました」。静かな感動を胸に、次の目的地に向かいます。



(右左) 1970年代の絵画のシリーズ、《点より》の2作品。
(右) 鉄板と自然石で作られた《関係項「沈黙」》(2010年)は、「沈黙の間」と名づけられた空間に。

茶の湯アドレス 20



李禹煥美術館

香川県香川郡直島町字倉浦1390
☎0871809213754
開館10時〜18時(3月1日〜9月30日)
10時〜17時(10月1日〜2月末日)
※入館は閉館の30分前まで。
10人以上での鑑賞は、事前連絡が必要。
休月曜(祝日の場合は翌日)
<http://www.benesse-art-site.jp/lee-ufan/index.html>



2日目 pm17:00
岡山県備前市

これぞ 最高の備前焼

「金重有邦陶房」

最

後の目的地は、岡山県備前市。直島からフェリーで岡山へ渡り、車で東へ2時間ほど。備前焼作家・金重有邦さんの陶房を訪ねました。「そのまま魅力的、お茶を点て、花を生けて一層輝く有邦先生の作品の大ファンです。月釜でもよく使わせていただいています」と村瀬さん。古代の須恵器をルーツにもつ古窯備前焼の陶家に生をうけた有邦さ

ん。伯父は「備前焼中興の祖」陶陽氏、父は電気窯による絞漉の生産を完成させた素山氏。偉大な先達から成形や焼成の技術を受け継ぎながら彼らが築いた桃山風の茶陶備前焼に留まらず、新たに吟味した「山土」を用いた造形で新境地を開拓したその作品は、高い評価を得ています。心のこもったご家族の手料理をご馳走になったあと、新作を拝見。「現

代作家の作品も、どんな茶室に入ってきていいと思っています。この茶碗は見慣れない姿かもしれませんが、これも備前焼なんです」。有邦さんの言葉には、休むことなく進化を続ける作家の姿勢が表れています。「作品の印象と同じ、隅々まで主の美意識が感じられる場でした」と大村さん。旅の終わりは、ひととき印象的なひとときになりました。

茶の湯アドレス 21



金重有邦陶房

岡山県備前市伊部
http://www.kaneshige-yuhon.com/

※一般非公開。

※12月5日～11日、

高島屋大阪店6階

美術画廊にて個展を予定。

☎06-6631-1101(代表)

「美しい作品が生まれるのは、美しい場所でした」



(右)茶室の床の間のしつらえ。掛物は華厳経。鎌倉時代の泥塔と室町時代の金銅仏を古材に配して。
(右)有邦氏監修のもとで制作に励む若手作家集団「ゆう工房」では、「嘉門工芸×婦人画報」のコラボレーション茶箱の茶碗も制作している(P299)。
(上)最新作の「伊部茶碗」。薪の灰が溶けて釉薬状になり、複雑な表情の景色を生み出している。



(右)「伊部花器」。焼成技術を駆使することで、揺らぐような個性的な造形に合わせた色を表現。

旅を
終えて…

旅の思い出を 茶会に



オリジナル木型で作った
世界にひとつの干菓子

「木型工房 市原」に注文した木型で作成。「新月から満月までの満ち欠けを表現しました。お客様ひとりひとりに違うモチーフをお出ししたり、茶会の日
の月の形に合わせるのも面白い」(村瀬)

旅で深まった
作家への思いを
床の間にしつらえて

掛物は知人のコレクターに拝借した、
李禹煥氏作《点より1980》。花器
は金重有邦氏作。「旅の思い出がよみが
えります。おふたりの作品でお客様を
おもてなしていただけるのが嬉しい」（村瀬）

